

望を捨て切れなかった。この弱さが後々まで私を苦しめた。

私と水野でアタックした。滝に突込むまでは非常に緊張した。後方のザイルが離されボートは滝に入った。“うまく行った”と思った瞬間、いつのまにか水の中にいた。ボートは転覆したのだ。“もう駄目だ”と正直思った。しかし別に焦りはしなかった。水中から水面の泡が見えた時、これはひょっとして助かるのではないかと思い必死で上へ泳いだ。水面に顔が出た時水野の方を見た。彼はまだ出て来ない。死んでしまったのではないだろうかと咄嗟に思ったが、その心配も束の間、彼の白いヘルメットが見えて来た。2人供助かったのだ。最初から終わりまで時間にしてほんのわずかであるが、私は非常に長く感じた。

今でも思い出したらゾーとする。“もしあの時サポートしてなければ……”。

第二は半月沢の雪溪である。川にスーブリッジが掛っていることは前日の偵察で分っていた。その時一日の偵察日を持つかどうかを考えたが、私は雪溪の手前でボートを止めることが出来ると判断した。明日一日で勝負をつけたかった。結果は失敗であった。80 m の高さから川の流れを見ると、目で見るとでは大きな差異があり雪溪の手前でボートを止められず雪溪を見ることは出来なかった。仕方なしにワイヤー梯子をたらし川

から80 m 上の日電歩道まで登った。詳しいことは省略するが、一日の偵察をしなかった為に、二日間も損をしたばかりでなく非常に危険であった。

あの時一日偵察すべきであった。三年間も待っているがわずか一日を待てなかった。私自身の焦りが招いた結果である。あらゆる状況を判断して一日偵察したところで、何の支障もないのである。最後の詰にこそより慎重にしなければいけないと思いつつ失敗をしてしまった。“待つ事”の大切さを思い知らされた。

最後に黒部のアタックを通じて始終心の底で先輩に頼っていた。リーダーとして行くからには先輩を頼りにしてもよいけれども頼ってはいけないと思いつつも駄目であった。私の精神の弱さであろう。実際に色々相談するのは当然のことであるが精神的にはもっと厳しさが要求されるのではないだろうか。

黒部に関して色々な事があったが追い求めてよかった。これだけは胸を張って言える。しかし、それも過去のものになってしまった。長年の苦難も“成功”その瞬間に打ち消されるのである。そのあとには新しい苦難の道が待ちうけている。

“苦難は長く喜びは一瞬にして消える”

(O B)

コロラドに向けて

前 田 修

’70 黒部は成功した、黒部は我々ボート班にとって、最大の目標であり情熱の結晶であり、執念ですらあった、黒部は終わった、しかしボートはこれからだ。黒部に対するあの情熱、あの闘志をさらに激流に向けなければいけない、そういう思いが今ここに一つのものとなって出てきた。コロラドである。’71 ’72 の新人の加入によってボートは再建され、飛驒川、天龍川、琵琶湖ファルト一周、吉野川、等いろいろなことを行なってきた。この中でもっとも貴重な経験は飛驒川である。’71 夏のアタックは飛水峽を目前に下呂下流約5 Kmの所で無残にも転覆、断念を余義なくされた。まさに退却の思いであきらめた、まさに悪夢のようであった。何としても飛水峽を突破したいという思いで春に向けトレーニングをした、その間一年生の離散が目だち6人から2人という激減であり、激流への考えを再認識しなければいけなくなった。しかし飛水峽への未練はすてがたく隊員の再構成を急いだ。

’72 春、隊員、引地、水野、前田、渡部、真鍋 出発地点、下呂、最終地点 犬山、今回も夏におとらぬ豪雨であり、川はあっという間に増水し荒れくるっている、今度こそは成功させるぞという思いと裏はらに何だか身震したくなるような濁流であった。いざボートに乗ってみると、予想以上であるボートの限界だとさえ思う、まるで荒海に出た感じである。何度となく転覆の危険にさらされる。皆必死だ。2名がうずくに巻かれて落ちる。何だか死の臭いがすると言っていたが、ほんとうにそういう気持ちにさせられる。第1日目の行程はみんな心身共にぐったりとなり飛驒金山で終る。その日は午後から雨が降りさらに増水する。2日目の行程にある飛水峽を思うと恐ろしくて寝られない。ほんとうに飛水峽に行くのかと思った、よく日は快晴、いよいよ出発だ。みんなはりきって

る。ボートに乗れば昨日までの想いは吹飛び、「何くそ、やったるぞ」という気になった。午後3時いよいよ飛水峽の入口である、偵察をするがすごい波の高さだ。そしてうずくに巻いている。一度突入すれば止る所はなく、その間は瀬の連続で途中で転覆すれば、すべて終りだ。いよいよ決行緊張の一瞬だ。まず一つ目の波を乗り越えた。全くボートは木の葉の様である。次の波を左前方からうけ前の一人が、たたき落された。必死で手をさし出す。落ちた方も、助る方もそれこそ必死だ。手をつかみボートにつかまらず、引き上げる余裕がない、つぎの波がすぐ目の前だ。オールをつかみ全力で体勢を立て直す。ボートの中は水びたしで思うようにきかないがなんとか乗りきる。ほんとに生きた心地がしない。兩岸とも絶壁の所に入った中は薄暗く轟音がひびく、地獄の道を行くようだ。何度となくボートの方向は変えられ、それを元へもどすのがなかなか思うように行かない。水をかい出す 岩をつく悪戦苦闘が続く。「出口が見えたぞ」という声を聞いた時には胸がジーンとなった。時間にすれば30分、ついにやった、みんなぐったりしているが顔は笑っている。当々やった。飛水峽をやった。最終日は日本ラインを下り飛驒川は2年ごしで航行した。今思えばよくやったものだ黒部以来のすごい川である。飛驒川 吉野川、琵琶湖一周等いろいろやってきた。’73 夏はコロラドだ、全力をぶつけて体当たりをする。ボートはこれからだ。まだまだフィールドは残されている。前進あるのみだ。(商学部4回生)

